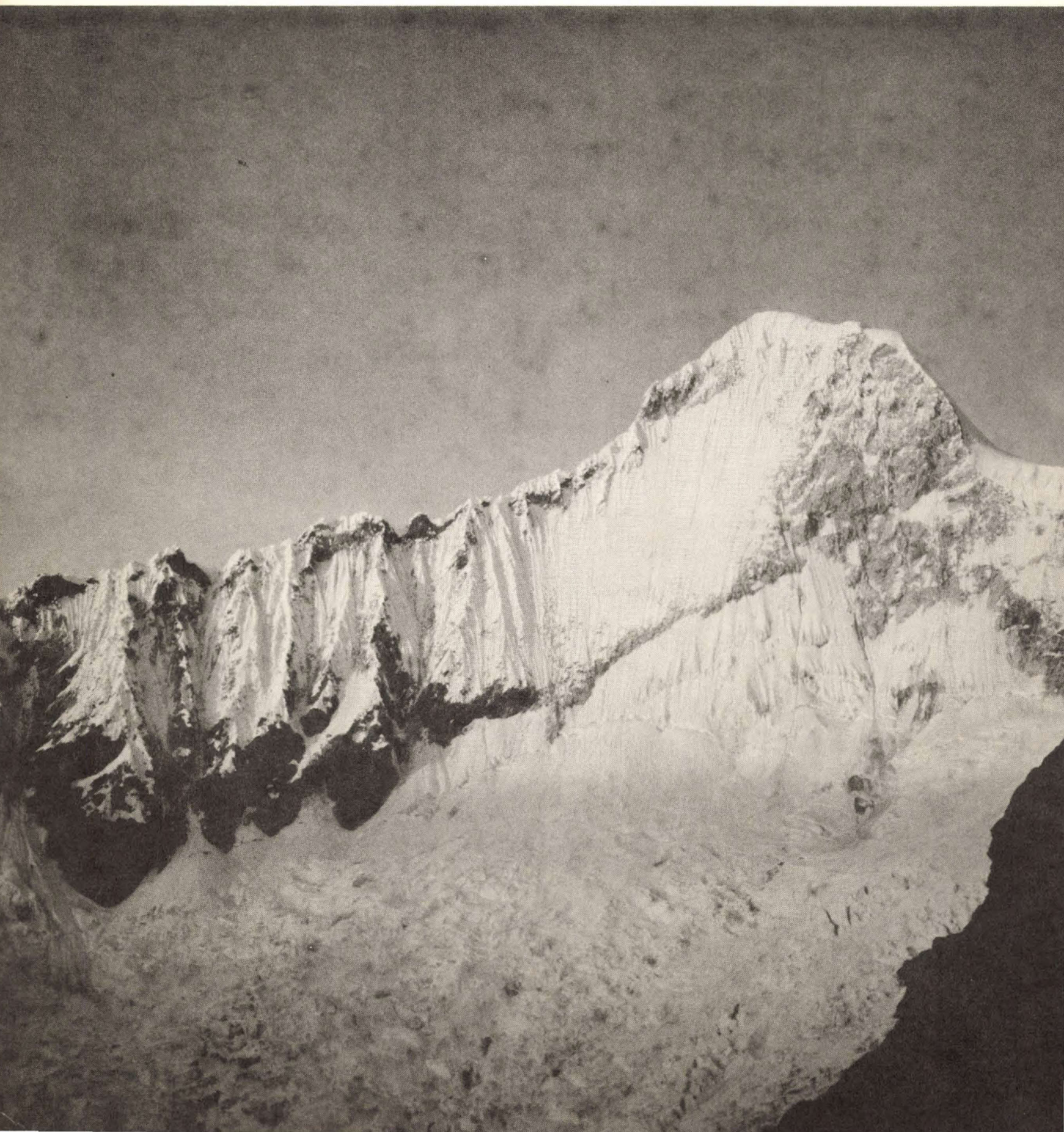
針葉樹会報

1983・4・ 第63号



表紙写真説明

ペルーアンデス・コルディェラブランカにて

ネバードデピスコという小さな山に登る途中、西側にあるワンドイ（標高・六三九五m）が朝日に輝いた。とても登る気もしないような南壁から落石、雪崩が絶えない。ガイドのウィヘルと僕はこのロンドイや北部山域のアルパマヨやピラミデスなどの鋭峰を見ながら、二人にして山頂に急いだ。

八十一年五月二十四日
早朝撮影
前神　直樹

目　次

・摺古木山、安平路山、南木曾岳……望月　達夫　1
・小無間山・大無間山……久保孝一郎　3
黒部五郎岳南尾根……佐藤　活朗　5
萬濃君慰霊碑除幕のこと……岡部　寛史　8
海外からの便り
引地君からの手紙……引地　真　9
ブラジルの山初見山……中島　寛　10
二木会通信……17
山岳保険加入のおすすめ……18
会務報告……19

発行日
1982年4月7日
発行所
針葉樹会
印刷所
東京和光印刷

針葉樹会報

第63号

編集人
〒177 東京都練馬区東大泉
2−5−25
小林 修

摺古木山、安平路山、南木曾岳

望月 達夫

摺古木山（すりこぎやま）（二一六八・五米）の山頂を越えて一時間余、にこの山を目指してきたのだった。

シラビソ山（二三六一・一米）のくだりにかかると、往　地図上で具（つぶ）さに見ると、安平路山は念丈岳や奥念丈岳

く手に安平路山（あんべいじやま）（二三六三・一米）の山体が、コメツガ　よりも少し高く、越百以南では一番高い。そして左右に

やシラビソの疎林を透してよく見えてきた。地図上で想　翼のような大きい尾根を張り出した均衡のとれた山容は、

像していたより、ずっと聳立した好い姿だった。私は前　私の心をいたくとらえた。同行の柿原謙一、山田亮三両

から摺古木山には登りたいと思っていた。それは一等三　君は頗る快調らしく、もうかなり先へ進んでいた。私は

角点の山であるのと、昔、JAC会報73号（昭和十三年　昨日少し風邪気味だったので、風邪薬を二回呑んだが、

二月刊）に谷博さんが寄せた「摺古木山」の一文の記憶　そのせいか軀がだるくて、今日はいつもの元気がでない。

が、多分そうさせたのであろう。　無理は禁物と、若い中山啓司、伊東正樹君が私の速度に

しかし安平路山は摺古木と越百山との中間の一峰にす　合わせてくれるのを幸い、マイペースで登った。

ぎず、地図上で見る限りあまり聳立した感じではないの　昨夜の満天の星と弦月にひきかえ、今朝から雲が多く

で、この山だけを目指したことは曽てなかった。ところ　なって遠望はきかなかった。摺古木小屋を六時頃出発し、

が偶々昨年八月上旬、多くの災害をもたらした台風10号　手入れの行き届いた山道をつたって摺古木山の頂へは七

によっても、この付近は幸い被害が少なく、そのうえ安　時四十五分に着いた。ここには一等三角点のほかに旧御

平路山の肩に中部電力が反射板を建てたため、摺古木～　料局の三角点もあった。展望は恵那山、大川入山、蛇峠

安平路間の深い笹藪が刈払いされているという情報を、　山あたりが、うっすら見える程度。

私は牧野衛さん、田口謹之介さんの二人の山友から頂い　シラビソ山と安平路山との鞍部までくると、右手の小

た。それで、笹の刈払いが使えるうちにと、去年の中秋　沢で容易に水の得られる所が二個所あり、野営の跡もあ

った。安平路山の山頂に近づくと登りがきつくなった。笹はよく刈払われていて、笹藪をわける労はなかったが、体調がよくないせいで私は近頃珍らしく苦しい登りを強いられた。直下で右へ、反射板へ行く刈払い道が分れていたが、そこから山頂までも藪こぎという程のことはなく、径は少し気をつければすぐ判った。ただ私は十歩登っては息をしずめるような遅々たる登りだった。

山頂に到達したのはシラビソ山から一時間四十分、文字通りやっと辿り着いたという感じだった。柿原、山田両君は折から俄か霰が降りかかってきた寒い山頂で、三十分も待っていてくれた。早速中山君がコンロで熱いしる粉を作ってくれたので、パン、チーズなどの昼食と共においしく戴き、熱い緑茶を呑んで三十分滞頂しているうちに、稍々元気を回復した。

天気は午後になると、しきりに驟霰が降って、ヤッケの他に防水ズボンもはくことになった。摺古木小屋に戻ったのは三時少し前で、すぐ帰り仕度をし一同中山君の車で大平の廃村へ下り、そこから舗装された車道で大平峠を越えた。

蘭の集落へ入って左側に「橋本屋」と看板をかかげた、いかにも昔ながらの民宿を見出し、突然だが三人の宿を頼むと、他にも泊り客が多そうだったが、快くひきうけてくれた。それで、われわれ三人は時日に余裕のない中山君らと別れることになった。中山君には、いつも車の厄介になるが、今回は浜松から私を乗せて東栄町、豊根村、新野峠を越えて飯田へ出、飯田駅で中央線経由できた柿原、山田君と落合って、さらに摺古木小屋まで車を走らせてくれたのであった。それは十月二十三日（土）の秋晴れの一日だった。

さて、この夜偶然泊った橋本屋だが、私の勘がよかったせいか、ここは一八〇年も昔から旅籠をやっていた家であり、前にも今西錦司さんや牧野衛さんが泊っており、また南木曽町の山友、三浦伝明君ともごく親しく、彼の家はここから八〇〇米ぐらいの所だということが判った。それで早速三浦君に架電したら、暫らくして奥さんをつれてやってきてくれた。

翌二十五日（月）は六時頃起きてみると、実に好い天気だった。われわれは今日の好天を期待して、南木曽岳（一六七六・九米）に登りたいため、ここに泊ったのだった。宿では七時半に朝食してくれ、八時十五分には三浦君の奥さんが態々登り口まで車で送ってくれた。天気好転で気温の冷えこんだ朝の山道を歩き出したのは八時半だった。

南木曽岳は、いま登る側はかなり急傾斜だが、桟道や鎖場がよく出来ていて、道もしっかりつけられているから何ら心配するものはない。ただ私は昨日の苦しい登りのあとだけに、山田君の好意に甘え荷物を少し持って貰った。

三時間の登りで山頂の二等三角点にふれ、一時間以上もゆっくりして晴天下の展望を恣にした。昨日登った摺古木、安平路山や新雪のきた南駒、空木岳あたりまではよく見えたが、木曽駒の本岳や御嶽は山頂だけ雲の帽子をかぶっていた。南アルプスは荒川岳、赤石岳から南部がよく視界にあった。

山田君の沸かしてくれたコーヒーをおいしく呑み、パン、チーズ、ミカンをとって三留野へ下ることにした。下り径は笹がかぶっていたがよく判った。ただし山頂の近くでは、昨日の時雨が雪だったらしく、笹の葉に積っており、先頭をくだった私は三十分足らずでズボンをかなり濡らしてしまった。稍々遅きに失したが不精をせずに防水ズボンをはいた。

径は大体五万分の一図通りで、上野原の村道に下り、日向の芝草に腰をおろしてゲートルをとった。そして町中を歩いて　洒な駅舎の南木曽駅に着いたのは三時半、頂上から二時間五十分かかった。

私は今迄の記述で、木曽の山谷の紅葉について何も触れなかったが、十月の二十日過ぎともなれば、当然紅葉が美しかったのは言うまでもない。今回一番美しいと感じたのは、初日、飯田峠から大平を経て摺古木小屋までの間と、次の日、時雨の降りかかった大平峠付近、さらに南木曽岳の登りで見た紅葉であった。

山としては安平路山も南木曽岳も一遊に値する。とくに秋の紅葉のころが好いと思う。摺古木山は、いまでは小屋から二時間足らずで達せられるから、この山だけを目的とするには些か歯ごたえがない。（一九八三年一月）

小無間山・大無間山（一九八〇年・夏）

久保　孝一郎

冷夏の八月、望月会長と夏山を約したが果せず、月かわり敬老祝日の連休に宮城さんと山行同伴を約して、行先を任され思案中のところ、望月さんから電話を頂き、「日本山岳会静岡支部の石間信夫さんの案内で、静岡駅から車に乗せて連れて行く」との由、二人とも便乗できそうなので欣然参加した。

当初、私は遠耳の聞き違いで、寸又峡方面から標題の逆コース往復をやるものと心得え、地元の石間さんと望月さんのリードなら、鬼に金棒、ただただホォローすればよいものと思っていた。白籏史朗著アルパインガイド南アルプスの一読による先入感は一層この考えを確かなものとした。

さて、九月十四日（日）快晴の朝、静岡駅で約束の八時四十分に一行、針葉樹会より、望月、佐々木、宮城の三氏と私、地元より前記の石岡さん（年令は望月さんの半年後の出生の由）、若手の中山さんと大原さんの以上七名が勢揃いして、小森さんのニッサン・ヴァネテーに便乗、出発する。途中、富士見峠上の駐車場で一休みし、快晴下の南ア展望と、めざす大無間山・小無間山の山なみを偵察をする。ここで私は始めて、寸又川側からでなく、大井川側、田代部落より、一七九六米峰にある電波塔の中部電力監視小舎に今夜泊まり、明日鋸歯と称する急登降の尾根を辿り、小無間山、大無間山を往復して田代にもどる計画を知った次第、前記案内書では藪と伐採跡で危険だから絶対立入り禁止と警告されているコースである。しかし石間さんが最近、田代より小舎まで往復していること、また終

戦後間もなく寸又川側より田代まで縦走されている実績等で、私らは全然ルート探しの不安は感じなかった。

車は峠を下り、大井川沿い集落を通り、酒屋に寄って缶ビール等を仕込み、田代部落に駐車した。ここに諏訪神社があり、鳥居前の神水に手を浄め、昼食とする。この部落に日本山岳会員で滝浪さんと云う方が住んで居られ、石間さんが挨拶に行くと、老夫人がわざわざお茶を運んできて下さった。この方には帰路大変お世話になった。上の小舎には水場がないので、各自二リットルあて水を汲み、正午頃出発する。

久しぶりの重荷を背負い、休み休みゆっくり登る。途中半分以上が植林帯だが、導標はしっかりついて登る分には迷う心配はまずない。最後の若干の急登の末、ガスの中に電波塔が見えてひと安心、今夜の宿の小舎はそこからすぐであった。石間さんがたくみに火をおこし、それまで無人で湿めっぽい小舎の空気が乾いてきた。そして小森さんが本場の静岡茶をおいしくたててくれ、若い人達がこまめに炊事の世話をした。

明くる十五日（月）の祝日、三時半に起床、ライトをつけて四時四五分に出発、早速稜線通りに急降下、急登高の鋸歯にさしかかる。大雑把に云って、三っめのピークが小無間山、三時間余を費して八時頃到着、ここは樹木に蔽われて展望きかず、地図上の外山沢側尾根すじの破線路が分岐しているが、皺っぽい感じ、これにひきかえ我々のコースは田代よりずっと判然としている。（前記案内書では寸又川側より来て、田代への下山を禁じて、このルートを下るよう書いてあるが、果していづれが得策か？）

明日の役員会にどうしても出席の必要あると云う宮城さんが、ここで早めに下山することになり、我々東京勢は「ことによると一日帰京の遅れる」旨を自宅へ電話連絡方依頼する。八時二十分ここで別れる。

さて、ここから大無間山まで、これまでの鋸歯と様変りして、緩い起伏だが水平距離が長い。少し行くと、左側が崩壊して、樹木がうすれ、展望がきく。ここが小無間山南峰で若干より高くなる。この辺から、いつも足達者な望月さんが、足の工合いが幾分悪いのか遅れ気味で、若い二人がガードして、ついてくれている。大無間山まで、だいたい広い尾根で密林の中であるが、路ははっきりして、心配していた倒木も大したことはなかった。小無間山より約三時間、少し手前に遭難碑があったが、ようやく大無間山の頂上を前に、今日の敬老祝日なることを考慮し、遅れ気味の望月さんを待って、年令順に、望月、石間、佐々木、私、中山、大原の順で頂上を踏むことにした。

大無間山の頂上は芝生になっていて、一等三角点の上に、測量ヤグラが立っている。私たちはこのヤグラの上に立って、四方の山やまの展望を楽しんだ。今日も素晴しい快晴で、暑い直射日光を木蔭に避けて、缶ビールやコニャク紅茶、メロンのデザートつきという、若い二人の担ぎ上げてくれた御馳走で昼食を済ませた。

帰途も往路と所要時間が大差なかった。特に鋸歯の上下が辛く、望月さんの足の調子も

好転せず、結局小舎着は五時半、往復十二時間四五分を費したことになる。ここで地元の三人は夜道を下山、我々東京勢三人はもう一晩、残りの水と食料で小舎に泊まることにする。予定外のこの一泊の夕・朝食もどうにか残り物で間に合わすことができて、私たちは翌十六日（火）朝六時に小舎を発ち、田代部落に八時すぎに着き、前記の滝浪家に御邪魔したところ、老夫人がタクシー等色いろ手配して下さったが、時間的に出払った後なので、十一時のバスまで、同家で食事のおもてなしを受け、大変お世話になってしまった。その時の老夫人のお話で、中村清太郎氏（一橋の大先輩の岳人、画家、南アルプスの先覚者）がなくなられる前に、この地の風光にすっかり気にいって、長期滞在されたことなど、大変興味深く聞かせて頂いた。

今回の山旅は本当に地元の厚情と天候に恵まれた、愉しい敬老祝日の行事となったことを感謝し、併せて中村清太郎大先輩ゆかりの地でその逸話を聞き得たことは真に意義深いものでした。我ら針葉樹会員で、もし同氏の著「山岳渇仰」を未読であったら、ぜひ読み給え。山に対する宗教的なまでに昂じた敬虔な憧憬の念は私の最も尊重する山岳文学にまで昇華している。

黒部五郎岳南尾根

佐藤活朗

今年も年末の休暇が近づいてきた。いつものことながら山の計画はなかなか決まらなかったが、暮れもおしつまり、藤本氏が眼をつけた金木戸川から黒部五郎岳の南（正しくは南西方向）尾根を往復する案が採用され、倉知氏以下比較的年代のバランスのとれた（?）六人が集まった。まず計画の第一は、それぞれに仕事（倉知・金子の両氏には家庭も）を持つ各人が万難を排して一二月三〇日早朝、神岡線猪谷駅に集合することである。

十二月三〇日　曇り

三九日夜、一人で東京駅から、あくまでビジネスの雰囲気の新幹線に乗り下西。名古屋駅ホームで倉知氏と合流し、高山線に乗車してからが山行の気分である。他の四名は上野から信越線の夜行で来るらしい。

従って六名全員が猪谷駅待合室に集合したのは、新穂高温泉方面に向う登山者の喧騒が去った頃だった。

タクシーで金木戸川に入る。最奥の部落を過ぎた頃から雪が見え出したが、いつかの夏双方谷をつめた時に下車した地点も過ぎ、とうとう林道終点の第二発電所（双方谷出合）まで入ってしまう。ここが南尾根の末端であり、順調なすべりだしに気を良くして出発

夏道もない尾根とて、取付の急斜面は発電所（揚水式）のパイプに沿って登り、尾根上に出る。見上げる南尾根は雪が少ないこともあって一面のやぶと森林におおわれ、地味な感じである。

歩きだしてすぐに熊笹とシャクナゲのやぶ

にとびこむ。前をあえぎ行く小林の姿も見失いそうな手強いやぶである。入山前にはスキーを持って行こうという話もあった位だが、とんでもない。そのようなスマートな尾根ではないらしい。そして発電所から四時間、段々に深くなる雪に、急傾斜のやぶに強烈な先制パンチをくらった気分で池の尾山（一五六〇メートル）の鞍部にテント地を見い出す。たった半日の労働の後の、昨日とは別の飲料に思えるウイスキーの味に感嘆しつつ眠りにつく。

発電所九・三〇――池の尾山一三・三〇

十二月三一日　晴れ

テントをたたみ終えない内に、金子氏は待ち切れないかのようにラッセルに飛び出して行く。その元気な後ろ姿を追って、わかんじきを付けて全員出発。ラッセルはひざの上位まで。比較的平坦な尾根に遅々たる歩みを交替できざんでゆく。危険な所は皆無であるが、相変らずのやぶ。倒木、木からふりかかる雪にまみれながら遂には逆ボッカとなり、六時間後、一九五五メートルの小ピークとおぼしき地点に、やや明日の頂上往復が案じられるものの、明日は荷も軽いしはかどるだろうということで、かわいドーム型のテント二張りのバースキャンプを設営する。

今日は途中の休憩の度に倉知氏が回してくれるワインで気を取りなおしつつここまで来た訳である。だいぶ減ったはずだがあのワインは下山までもつだろうか。

力にものをいわせた金子氏の大きなキスリングからは豪華な食料や、大きなローソク等々、色々出てくる。

池の尾山八・三〇――一九五五峰一四・三〇分

一月一日　晴れ

男ばかり六人の新年は、風もなく静かに明けた。七時四〇分出発。はじめに鞍部まで下り、三日目もやはり森林の、おおむねゆるやかな尾根をラッセルしてゆく。二時間程で尾根をふさいでいる岩壁につきあたるが、これは前神氏トップで右側の雪の壁をかん木をつかんで何なく通過。

雪はひざからもも程度である。休む度に見る二万五千分の一の地図は頂上までまだはるかな道のりであることを示し、眼に毒である。

ようやくこの尾根で最も顕著な二二九二メートルのピークに着き、大きく下って鞍部に着く。二時には引き返すことにしていたが、すでにその時分で、ラッセルがつらく感じられてくる頃でもある。

鞍部から少し登った所（そしてここからが黒部五郎岳の本当の山体に取りつくことになるのだが）でもう無理だなという空気になる。しかし金子氏はあくまで発高の意志を示し、皆が休んでいる間に、あきらめきれず、前神氏とてそこからさらに登高を続ける。（両氏は森林限界を抜けた所で引き返した。）

パーティの最年長者で本年四十歳になろうとする倉知氏も意気さかんに引き返す条件として明日必ず再アタックを行うことの確認を求め、さもなくば夜までかかっても（たしかに森林帯に入れば体力だけが勝負だが）頂上を往復しようと提案するのだった。私は一月ばかり前に倉知氏と行った富士山（御殿場口二合目から日帰りで往復）で常に前を行く氏

の体力を確認していたものの、あらためて舌をまく。日常の精進と強い意志がこの場で発揮されるのだろう、と疲れた頭で考える。

ともあれ下ることに決し、二二九二メートル峰に登り返す途中でふりかえると、金子氏一行のトレースは森林限界をつきでて、頼もしげにガスの中に消えているのだった。

夕刻が近づいて晴れ上がった空気に、はるか槍・穂高の峰が望まれる。ゆっくりと下る途次、左（南）側には笠ケ谷がひとり地平線をさえぎり、次第に暮色につつまれてゆく。疲労と、一日の充足感に陶然としながら、午後六時テントにころげこむ。

BC発七・四〇―引返し点（二三五〇メートル付近）一四・二〇～一五・〇〇―BC着一八時

一月二日　快晴

絶好の登頂日である。残念ながら金子、前神、小林は時間切れで下山ということになり赤木岳を望む場所で記念撮影後、見送られつつ、倉知、藤本、佐藤の三名で出発。トレースに助けられ、信じられない位に行程がはかどる。事実私も、登らないでおくものかという気持になっていた。

昨日の金子・前神氏の最高到達点（二四〇〇メートル位）に一〇時四五分にはついてしまう。彼らの残した赤布が主の再来を喜ぶかのように微風にふるえている。

ところが、森林限界から上は雪もしまるだろうとの期待は見事にはずれ、わかんじきも置いてきたこともあり、深い所では股までズボズボもぐる消耗的行進になってしまう。

下から見て森林限界と頂上の中間に悪く露出していた岩稜は何ということもなく越え、やや平垣な鞍部で休憩。もう障害は何もなく、見上げる頂上は青空を背にした白い三角形である。「山」の典型であるようなその三角形の頂点をめざし、念のためアイゼンだけを腰にぶらさげて登ってゆく。そして一時間後、三人は黒部主部岳の頂上にあおむけに寝て息がおさまるのを待っていた。

あらためて見回わせば、快晴微風の下、北アルプス中心の山で見えない山はない。また、ここにも雲の平にも人の気配はさらにない。

一二時間の歩行の末、満足して今日はひとつになったテントに帰りつく。

BC発七・三〇―森林限界上一〇・四五―頂上一四・二〇―BC着一九・一〇

一月三日　晴後雪

ゆっくりと出発したが、下りはさすがに早い。こんな所よく登ったなと、あらためてやぶのひどさを話題にしつつ、四時間弱で第二発電所へ。雪に変った空の下第一発電所へと林道を急ぐ。そこからタクシーで富山へ直行し、開いている店を見つけて三日分の正月気分を急いで回復し、日本酒と海の幸に陶然となる。

その店で藤本氏の知人の、倉知氏と類似年代の人（法政のOB）と隣り合わせたが、その一行（やはり三人）が小窓尾根から剣岳に登り雪が少なくて楽だったと言っているのを聞いて倉知氏が小声で、剣にすれば良かったかな、とつぶやいたのが私にとってはこの山行最後の驚きであり、またおかしくもあった。

BC発九・三〇―第二発電所一三・一〇―第一発電所一五・二〇～五〇―富山一七・〇〇

萬濃君慰霊碑除幕のこと

岡部寛史

九月一二日、彼の想定上の命日である九月十日を過ぎた最初の日曜日に、御両親、お兄様の御計いで、長野県青木湖畔に集い、彼のありし日を偲ぶ機会を持つ事が出来た。湖臨荘御主人の長沢さんの厚い御協力も頂いて、裏手の小高い丘の中腹に完成した、彼の慰霊碑は、その一周忌に我々残された者達の前に、ひっそりと佇むことになったのである。

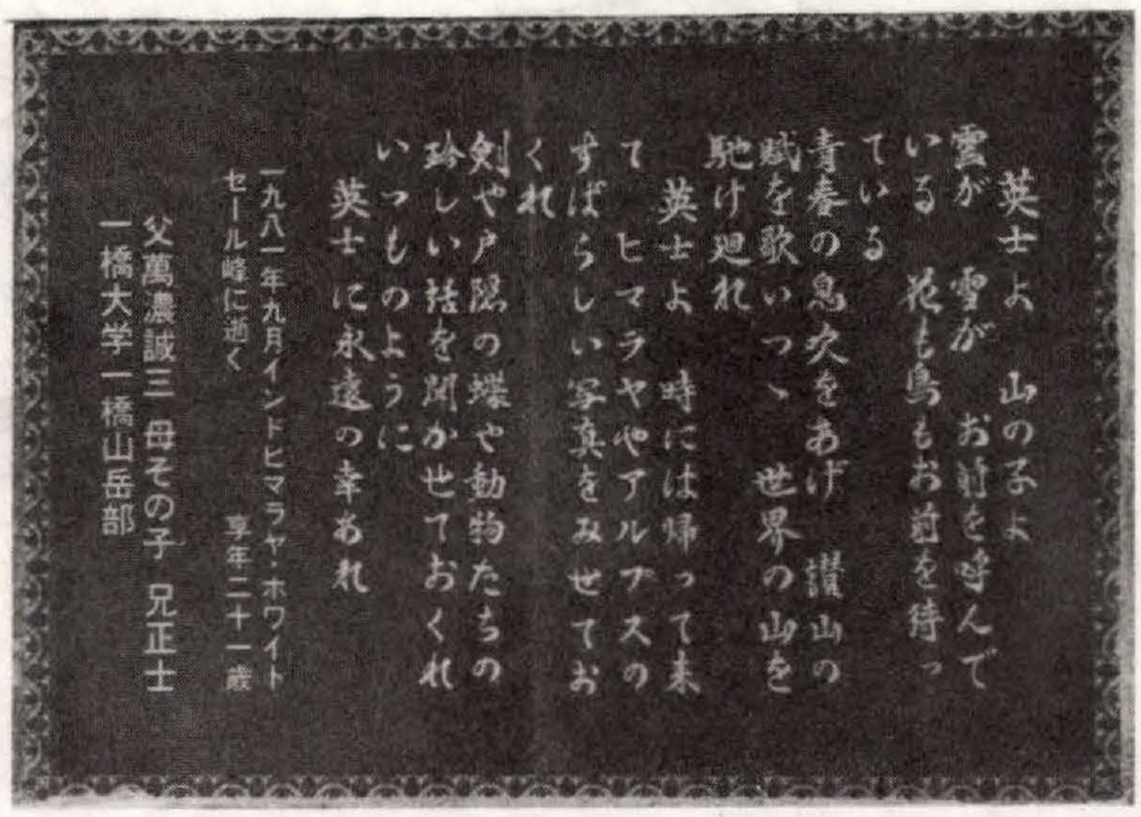
（慰霊碑より戸隠連峰を望む）

折しも、台風が本土上陸を危ぶまれ、晴れた日なら、遠く戸隠の連山を望めるはずの慰霊碑の前で、花捧ぐ手もいかばかり凍えるかに見えたが、虚空をみつめる誰れの目にも、彼の最も愛した戸隠の峰々が、映っていたに違いなかった。お父様の碑文を読み上げる声は、凛として毅然たるものであったが、木の葉を伝う雨音は冷たく、皆で歌った山讃賦もなにかしらもの悲しく煙雨の中に消えていった。

学生諸君と、OBの前神氏と私、それから彼のお兄様とは、その日のうちに、帰京するつもりで、昼食を終えて後、御両親と宿の御主人にお別れをして、一行松本へ向かったのだが、雨足は鈍るどころか、その頃にはもう、鉄橋の橋ケタすら押し流す程に濁流と化し、一帯の交通網を遮断するまでに至っていた。そして結局、我々は、萬濃君の慰霊碑の置かれたあの丘の麓へ、今来た道を引き返えさざるを得ぬことになったのである。それは、あたかも、今はない彼が我々との別れを惜しむかの様でもあった。

嵐も峠を越した翌朝、宿を出立した我々は、しかし、昼を過ぎても尚、大町の駅前に足止めをくわされたまであった。する事もなしに、駅前に皆でボンヤリしていると、いつしか、台風一過の秋空が、雲の間に間にそのあたたかい目指しを、こぼし始めた時、見上げた空のむこうには、くっきりと後立山の峰々が、その姿を現わしていた。

彼と歩いた稜線のいくつかは、あの山の彼方にあるのだと、そんな気持ちにひたっていると、やがて遠くから、列車の軌条のきしむ音が聞え出して来た。どうやら、やっと動き始めたらしい。そくさと、改札口に向かう私の脳裡に、昨日の碑文の一行が甦って来た。



（萬濃英士君慰霊碑碑文）

「英士　山の子よ……」

振り返った大町の空には、後立の山並みが清楚な面持ちで微笑んでいるのが、美しかった。

海外からの便り

天津在住の引地真・サンパウロ在住の中島寛両氏から書簡並びに原稿が届きました。

引地君からの手紙

一九八三年一月一八日

引地　真

藤本様

拝啓

厳寒の折如何お過ごしですか？

まずはご結婚おめでとうございます。前神氏、周一氏も今春挙式だそうで、誠にお目出たく存じます。すべて一橋山岳会の承認を得たうえのことだと思います。きっとよい人でしょう。

正月山行、私も参加できなくて大変残念に思っています。こちらに来て以来山を見ない生活がつづいていますが、そのうちに中国の山を登るつもりです。私は正月をハルビンで過ごしました。ハルビンはとても美しい街でした。ヨーロッパ風の建物と美しい女性がたくさんいました。

私は元旦の夜、ホテルの芸能大会で日本代表として、今中国で最もヒットしている歌『北国的春』を唄い、ダントツの一位になりました。今年は世界的暖冬の影響で、ハルビンでも比較的暖かく、日中ではマイナス15℃くらいまで気温があがりました。それでも顔面に刺すような寒気はピリピリして、冬山を想い、いい気分になりました。

私は三月二〇日頃～四月一五日頃まで休暇がとれそうです。中国の山を登ろうかと考えていますが、この国では色々と問題がありそうです。もしよければ、この時期に中国の山を訪れる登山隊、トレッキング隊、または個人的に山に登ろうかと考えている人物がいるかどうか調べていただけませんでしょうか？もし山に登れないなら、シルクロード周辺をぶらぶらしたり、許可がとれるならチベットにも行ってみたいと思っています。あるいは、日本に帰ってグターとするかもしれません。

結婚準備でいろいろお忙しいこととは存じますが、以上の点よろしくお願いいたします。

私は一応アポロとランニングでトレーニングはしています。

倉知氏、前神氏、金子氏、加藤氏、佐藤氏、松田氏、中西氏、岡部氏、米田氏、小林氏、宮下氏以下針葉樹会の方々によろしくお伝え下さい。また現役の学生の諸君、その他日本在住の関係者の皆様にもよろしく。

寒さの厳しい折、くれぐれもお体を大切になさって下さい。

敬具

引地　真

PS　三月二一日　ここ塘沽での私たちの生活がテレビ東京系で放送されるはずです。私も少しは映っているかもしれませんので、お暇でしたらご覧になって下さい。

ブラジルの山初見参

中島　寛

I　ブラジルの山と人

一週間遅れで届く朝日新聞を見ていたら、初雪のニュースが出ていた。氷の花を纏った赤城山の写真があって、〝紅葉凍る〟という見出しがついていた。一瞬ドキッとした。そんなに長い間、日本を離れていたわけでもないのに、こんな情景をすっかり忘れていたからだろう。それにしても、雪の降らないところにいると、雪は、われわれ日本人に、たまらなく郷愁をかきたてるもののようだ。

例えば晩秋に日本の山に登るとする。登るにしたがって紅葉が深まり、葉の色が黄色から赤に、更に燃えるような深紅に変化していく。そして、岩場にとりつくと、完全に氷雪の世界だ。自分の身体と気持が、なかなか状況の変化についていけなくて、とまどい、焦立ち、しかし、だんだん、新しい世界に馴んでいく過程が、とても楽しい想い出として残っている。登攀を終え、思わぬラッセルを強いられながら稜線に飛び出し、西風にあおられつつ、岩にこびりついた〝エビの尻尾〟を煩張った、なんてことを脈絡もなく想い出したりする。

ブラジルには、こういった、季節の移りかわりに伴う自然の変化とか微妙さが、決定的に欠けている。

ブラジルは、自然の豊饒さという点では、他に類を見ない程、国中、どこにも、豊かさがあふれている。しかし、全てが馬鹿でかく、大ざっぱで、のっぺら棒である。山も同じだ。あの観光地で有名なリオ・デ・ジャネイロには、大きな岩の塊まりがゴロゴロしている。しかし、樹も草も生えているわけでなく、ただの岩山だ。沢とか尾根といった襞もない。そのひとつひとつをとったら、あるものは、谷川岳の衝立岩正面よりもはるかに大きいだろう。しかし、それらは、あまりにも無造作というかあけっ広げで、われわれの知っている山岳地帯特有の隔絶感とか神秘性といったものがまるでない。だから、風景としては面白くても、登る意欲が湧いてこない。誰でも、イパネマの海岸にゴロゴロして、裸の美人を

眺めている方を選んでしまうのだ。

そんな折、偶然、何人かの〝山屋〟と知り合いになる機会があり、次第に、ブラジルでの山登りにまきこまれていった。そしてブラジルでもけっこう面白い山登りができることを発見するにいたったのである。

最初の契機は、七月中旬、たまたま「ベージャ」という週刊誌（七月十四日号）を読んでいて、四人の山男の写真を見つけたことだった。マカルーの西壁を登る、と書いてあるので、なおさらびっくりした。早速、彼らの身許を調べ、電話をかけると、「今日、集会があるから来ないか」と誘われ、そのまま、ここサンパウロの代表的な山岳会のひとつ、サンパウロ山岳会（略称ＣＡＰ）の会員になった。

ここ一年ばかり、会う人ごとに「山岳会があったら教えてほしい」とたずねてきたが、答えはきまって、「そんなものあるはずがない」というものだった。しかし、実際には、サンパウロにはＣＡＰの他に、ＣＥＵ（大学旅行クラブ）というサンパウロ大学に本拠を置いた山岳会があり、けっこう活発な活動を行なっているし、リオデジャネイロにもカリオカ旅行クラブ他五～六の山岳会が活動していることがわかっている。

ＣＡＰは、一九五九年に設立され、現在、活動会員数約三十名である。今回のマカルー西壁遠征は、ポーランド隊に相乗りした形だが、彼らなりに、長年の夢を実現したものだった。出発直前の三人の隊員に会う機会があり、ゆっくり話す余裕はなかったが、それでも、高度順応の難しさや遠征隊の人間関係の複雑さについて自分の経験を活し、僕自身も人並みに寄付をして送り出した。

その後も、彼らとは文通が続き、ベース・キャンプから会に報告が届いたときには解説係としてひっぱり出され、時には一諸に山に出かけているうち、次第に、自分のなかに仲間意識のようなものが芽生えていった。この隊は、不幸にもポーランド隊員二名を失ったが、去る十月十日、ポーランド隊員が頂上に立つことができ、表向きは、成功を収めることができた。しかし、ブラジル隊員の手紙によると、隊の運営は、滅茶苦茶で、隊員間のいざこざも多く、彼らは、はじめてのヒマラヤ登山で、そのきびしさと残酷さを骨身にしみて感じたらしい。帰国した三人は、予想どおり、一様に、「もう二度と行きたくない」と話していた。

彼らの次の課題は、ＣＡＰだけでヒマラヤ登山隊を組織することのようだが、当面は、本年末から来年二月にかけて実施される第一回ブラジル南極探検隊にロジスティックス担当として協力することが決まっており、二人のメンバーが参加することになっている。この計画にも、若干、首をつっこんでいるが、どんなことでも、新しい企画に参画するのは楽しいもので、久し振りに、一九六六～六七年にヒンズークシュ遠征隊を送り出したときのような気分を味わっている。

次の偶然は、九月はじめ、トロントで行なわれたＩＭＦ総会に出席した後、ワシントンの米州開発銀行（ＩＤＢ）を訪問したときのことである。

そこのブラジル担当部長（アメリカ人）が

大変な山好きで、仕事の話はそっちのけで山の話に興じ、それでも足りず、彼の自宅にまでひっぱっていかれ、最後は、ブラジルに来たら、一諸に山登りをしようと〃男の約束〃をとり交した。彼は四一歳だが、出張のときも必らずEBシューズを持参して岩登りをやっているらしく、とくに、リオ周辺の岩場がお気に入りだった。そのとき、彼がリオでいつも一諸に登っている青年を紹介してくれたのだが、それがアンドレ・シルバ・イリヤ君である。彼は、昨年七、八月号の「マウンテン」誌にブラジルの岩登りの紹介記事を書いており、僕の方は、そのコピーを頼りに、リオに出張する度に彼を探していたが、どうしても見つからなかった。従って、ワシントンのような離れたところで偶然、彼のことを紹介されたので、びっくりしてしまった。

帰国は、アンドレ君に連絡をとると、早速飛んできてくれて、直ちに相談が出来上がり、僕がリオに出張で出かけた週末を利用して、リオの岩場を案内してもらった。

こういう風に、偶然知り合った〃山屋〃とつきあいはじめると、またたく間に交際の輪が広がっていく。こういう話をすると、サンパウロ在住の日本人は、山屋の世界は「まるでマフィアみたいですな」とあきれているが、今では最低、月に二、三回は彼らとどこかに出かけたり、話し合いの機会をもっており、僕のブラジルでの貴重な生活の一部になっている。

ブラジルでは、登山をする人はまだきわめて稀れで、登山の普及という面では、ほんの緒についたばかりである。山の道具を売っている店は一軒もない、山の本とか雑誌も全く見かけない。山岳会も幾つかはあるが、お互いの間のコミュニケーションはほとんどないし、たいていは、ハイキング・クラブに毛のはえた程度である。

とくにケービングは盛んで、ブラジルで登山を本格的にやっている人は、ケービングと二刀流のケースが多い。僕も、一度、アレアドⅡという洞窟のケービングに参加したが、ケービングというものは、底なしの穴の中をワイヤー一本に縋って下っていくものだとばかり思っていたが、どうもそればかりでないことがわかった。

僕がそのとき体験した洞窟は、長さが三・五キロメートルだが、標高差は五〇メートルしかなかった。ここを下から上に抜けたわけだが、地下河を遡行しているようなもので、丁度、天井のつぶれた沢登りといった感じだった。勿論、この地下河も、基本的には鐘乳洞で、滝壺の水が石灰石の岩を溶かしつつ、山腹をつき抜けて出来たものだろうし、ハイライトは、いかに大きな、これまで知られなかったガレリアと称する鐘乳石の広場を見つけるかということにある。

しかし、〃垂直型〃の洞窟もさることながら、僕らの遡行したような〃水平型〃のものがブラジルには多いというのを知ったのは新しい発見だった。この〃水平型〃の洞窟で、ブラジルでもっとも長いのは四〇キロメートルあるというのを聞いて、あきれてしまった。

さて、ブラジルで登山をやっている連中を観察すると、次のような共通点があることがわかってきた。

第一に、ほとんど全て中産段級に属し、所得階層としては、上位二〇%以内に入る人たちであることだ。しかし、本当の上流階級の人間はあまり見かけない。

第二に、ヨーロッパ（東欧を含む）からの移住者とその二代目という人たちが多い。例えば、CAPの会長をやっているアダベルト・コンパシィック（通称アディ）は僕より一つ上の四五歳だが、ドイツ人。シーメンスの派遣社員（エンジニア）として十五年前にブラジルに来て、そのまま居ついてしまった男である。こういうのが多い。

第三に、夫婦、親子ともに会員になっているケースが多く、山行にしてもキャンピングにしても、家族ぐるみ参加することを前提にした企画が多い。ヒマラヤに出かけたマックスとアレシャンドレの場合も、両親ともに大変な山好きで、CAPの会員である。

第四に、岩登りなら岩登りだけをやっているという〃専門家型〃の人は少なく、岩登りもケービングもハング・グライディングも、といった〃百貨店型〃の人が多い。従って、どうしても経験がものを云うから、三十～四十歳台が中心になる。

第五に、どこに出かけるにしても、地図もガイドブックもあるわけでなく、探検的要素が多く、未知のものを知ろうとする好奇心が動機になっているケースが多い。従って、どこの国でも、最初はそうであったように、測量、動植物、地質といった自然科学系の学問と何らかの関わりをもっている人たちが多い。

第六に、とくにリオで岩登りをやっている若い連中に顕著だが、登山やケービングを新しいファッションとして把える傾向が強く、登り方にしても、道具にしても、世界の新しい潮流に敏感である。この点は、何も登山やケービングに限らず、ブラジルのような発展途上の中世国では、どんな分野にも見られる一般的現象である。

さて、それでは、実際には、どんな山登りをやっているのか、以下、僕の体験した山行の一例を報告しておきたい。

Ⅱ　ピコ・ドス・トレス・エスタードス（二六五五メートル）登頂

この山は、サンパウロ、リオデジャネイロ、ミナスジェライス三州の州境にそびえており、日本で云えば、さしずめ、〃三国境〃とか〃三国岳〃といったところだ。

ある地図（といっても道路マップ程度の粗いもの）には、この山が二六五五メートルと記載されており、ほぼその位の標高と思われるので、ここではそれに従っておいた。しかし、正規の地理の教科書には、この山のことが全く触れられていない。日本の国土地理院に相当するIBGEにも問い合わせてみたが、IBGEに登録されている二五〇〇メートル以上の山は八峰しかなく、どういうわけか、この山は含まれていない。（ちなみに、ブラジルの最高峰は、アマゾニア州のベネズエラとの国境にあるピコ・デ・ネブリーナ（三〇一四メートル）である。）このことを、CAPのある物識りにたずねたら、「誰も山の高さなんかに関心をもっていないよ。教科書だって信用できないし、同じように認知されて

いない山は、他に幾らもあるさ」と平然としていた。

このトレス・エスタードス峰には、登山の対象としてはこれまで誰も登ったことがないらしく、CAPでも、過去一年間、いろいろなルートから何回もアプローチしたが、主として悪天候と時間切れのために、その度に撃退されてきたとのこと。図らずも、試登の企画に乗せてもらうことになったわけだ。十月九日からの四連休を利用して出かけることになったが、一日目は雨で出発を延期した。

十月十日。曇りだがともかく出かけてみようということになり、四台の車を連ねて、四時三〇分、サンパウロを発つ。同行者は、隊長格のアディ（四五歳）、それにガルバ（五四歳）、ピーター・ベリー（四三歳）の三人。アディは、前述のように、わがCAPの会長をつとめるドイツ人で電気エンジニア。一九〇センチをこす大男で力持ち。見るからに〝金髪の野獣〟を思わせる。卒先垂範の頼りになる男である。ガルバは、ポルトガル系のブラジル人で、ミナス・ジェライス州の出身。銀行員で、人が好く、何事にもよく気がつき、CAPのまとめ役である。小柄だが、筋肉質で身が軽く、年令を感じさせない。ピーター・ベリーはニュージーランド人で、一九七〇年前は、ペルーに在住、コルディエラ・ブランカを登りまくった経歴をもつ。彼もアディに劣らぬ大男だが、IPIというブラジルでもっとも権威のある研究員（物理）で、とてもシャイだ。そのせいかどうか、未だに独身である。この三人は、僕とは年令も近いし、話が合うので、最近は、この三人と組んで何かやることが大変多い。

他に、登山には加わらないが、応援部隊三名。それぞれ家族を同行（ピーター・ベリーは除き）、彼らはガルバのファゼンダ（農園）に残して、四人で、三日間のうちに登ろうという算段である。ブラジルでは、車がなくてはどこにも行けないし、他方、家族を放り出して一人でどこかに出かけるという習慣がないため、こういったパターンが一般的になる。仕方なく、わが家も子供二人を同行、女房が車を運転して駆けつけた（僕自身は相変らず車の運転が駄目なため）。

サンパウロからリオデジャネイロまで、北東に向かって、片道三車線の国道一一六号線（通称ドウトラ街道）が延びている。ブラジル経済の動脈ともいうべき幹線道路であるこの街道を二四〇キロ走り、つづら折れの山道を一七五〇メートルの峠まで二七キロ登り、そこからほんの少し下ったところに、目的のファゼンダがあった。山道といっても、立派なアスファルト道路で、標識もちゃんとしている。車社会ブラジルのありがたいところだ。

この付近は、イタチアイヤ国立公園の一角で、日本で云えば、丁度、日本アルプス国立公園にあたる。この山道も、まわりは深い原生林で、ところどころに別荘が立ち並び、樹の間ごしに岩山や滝がのぞき、松本から高山へ抜ける国道に似た感じた。日本と違うところは、牛のマークのついた道路標識がところどころにあり、〝牛の群れに注意〟と書いてあることだ。標高一九〇〇メートルの気候のよい山のなかで牛を放牧しているわけだが、プールもテニスコートもあり、ファゼンダと

いっても大邸宅だ。四、五家族入りこんでも少しも目立たない。

十一時三〇分、身仕度を整え、アディのトヨタ製ランドクルーザーに乗りこむ。乗用車では無理だが、ランドクルーザーならかなり上まで行けるので歩く時間を節約しようというわけだ。十二時、高度計が一九五〇メートルを示す地点からいよいよ登行開始。

二人用のテント二張り、三日分の食糧、個人装備、それに、水は補給できないことを予想して、各自、二〜三リットル携行する。結局、荷物は二五キロ位の重さになってしまった。岩登りはないはずだというアディの意見で、ザイルと三ツ道具は残した。装備類は、日本の場合と大差ないが、違うのは、ファコンと称する刃渡り六〇センチ程の刀、高度計、それに蛇にかまれたときのために血清を携行したことである。幸いにして蛇には出会わなかったが、経験してみると、この三つとも、ブラジルの山ではいかに必需品であるかがよくわかった。

周囲はすっかり霧におおわれ、せいぜい五〇メートル先までしか見透しがきかない。しかし、この山域では、晴天を待っていては、永遠にチャンスは廻ってこないとのことなので、ともかく出かける他ない。四〇分程、フェゼンダの柵に沿ってゆっくり登った後、いよいよ尾根にとりつく。最初から道はないから、ファコンを振って道を切り開いていかなければならない。カヤのような草が腰位までの高さで密生している。その間に、竹と木が生えており、その枝葉が頭を抑えつけている。従って、まず目の上の枝を切り、次ぎに足下の草を刈り、一歩一歩進んでいくしかない。

状況は違うが、深雪のなかをラッセルしていくのと同じだ。先頭の者が道を作り、後続の者がそれに従い、三〇分位おきに先頭を交替していく。僕自身も、当然、何回か先頭に出たが、それは大変根気のいる、きつい肉体労働で、時々、深い穴に落ちこんだりすると、「ヒロシ、これがブラジル式アルピニズムだぞ!」などと皆にはやしたてられた。彼らは、昨年、ブラジル最高峰ネブリーナに登ったそうだが、そのときは同じような〝やぶ刈り〟をしながら、全部で三三日間かかったという。

登るにしたがい、天気は次第に悪くなり、霧雨に変わり、尾根の上では風も強くなった。先の見通しが全くたたない状況だけに、不安が募る。しかし、何回も偵察をしているアディには、この辺の地形の概要が呑みこめているらしく、尾根の分岐や高度状のところに出ると彼の指示を仰いでルートを決め、黙々とファコンを振って道を開く作業を続けていった。

このように、五時間も単調なルート工作を続け、高度計が二五〇〇メートルを指す尾根上の小ピークに出る頃には、それでも、籔も少しはまばらになってきた。その上、尾根上の岩から岩を伝って登れるので、かなりスピードを上げることが出来るようになった。このあたりまでくると、さすがに、高山的な雰囲気が出てきて、しゃくなげの樹も目につくし、岩の周囲に岩つげ、エーデルワイスの種類と思われる高山性の草花が咲いていて、目を楽しませてくれた。

十八時、そろそろ暗くなりかけた頃、二六〇〇メートルのピークの裏側に風蔭になった平担地を見つけ、テントを張ることに決める。天候は相変らず好転のきざしが見えない。

十月十一日。雨後晴れ。夜半になると雨が激しくなり、寝袋も水びたしになる。まわりの概木のなかで、鳥が鳴いているが、それが蛙のなき声にそっくりなのが面白かった。

四時頃には雨もやむ。五時三〇分には起き出し、早々に朝食をとるが、相変らず、空は厚い雲におおわれ、視界がきかない。この二六〇〇メートルの小ピークから尾根が幾つか出ているので、ここから先は、見晴らしがきき、地形が判明しないと、先に進むことが不可能だ。皆は「晴れなければ下るしかない。また来ればいいさ」と下山を主張するが、僕にとってはブラジルではじめての登山である。何とか晴れてほしいという気持ちで、「雲足が速いし、雲がうすいから、待てば何とかなるのではないか」とねばる。

結局、近くの岩蔭にもぐりこみ三〇分程様子待ちをし、それにも退屈しかけた頃、急に雲が切れ出し、周囲の山々がはじめて姿を見せた。目前にトレス・エスタードス峰が大きくそびえ、その奥に、更に高い山がひとつ見える。

八時三〇分、テントはそのまま残し、軽装で出発。風が強い。ガスが晴れかかっているが、雲の量多く、なかなか完全に晴れあがらない。相変らず、フォコンで皺をきり開き、道をつけながら、ボツボツと進む。目の前に目標が見えているとき、かえって、遅々として渉どらないことに焦立つ。しかし、三つの小ピークを越し、十二時十五分、とうとうトレス・エスタードス峰の頂上に着いた。高度計はほぼ二七〇〇メートルを指していた。頂上には、三角点があり、三つの州の名前が三方に書かれた鉄パイプ製のやぐらが風に倒れて横になっていた。それが〝三国岳〟の証拠である。それを起こし、石を積んで脚の部分を補強する。三角点の標示によると、一九五八年に、測量隊がここに来ていることは確実だが、その後二四年間、誰も来た気配はない。少なくとも、ただ登ることを目的にここに来た酔狂な人間は、われわれが初めてのようだ。

この付近の山々は、深い原生林こそないが、南アルプスのような連山で、山歩きの対象としては、変化に富んでいて面白いところだ。CAPでは、来年はここを縦走する計画をもっているらしく、アディは、「天気がよければ、五日間で抜けられる」と計算していた。

十三時三〇分、昼食の食べ屑もビールの空缶も皆、ザックに詰めて、頂上を後にする。この頃からようやく空は晴れあがる。登頂できた満足感が加わり、のんびり雑談しながら下る。あれだけ苦労してつくったルートも、いったん出来てしまえば何のことはない。帰りは簡単で、二時間でテントに帰り着いてしまった。濡れものを乾かし、時間をかけて食事をつくる。そして、夕食は、夕焼けに染る山々を眺めながらアディがハーモニカでアルプスの民謡を演奏するのに聞きほれた。

十月十二日、小雨。あんなにいい天気だったのに、夜半からまた雨。せっかく乾いた寝袋も、すぐぐしょ濡れになる。

七時、小雨のなかを出発。わかりにくい部

分もあったが、登りのときの切り開きとケルンのお蔭で、二時間でランドクルーザーを残した地点に帰り着くことができた。

最初から最後まで、雨にたたられた山行だったが、そして、登山というより、鉄道工事にでもかり出されたような三日間だったが、ひとつのことをやり終えた、という満足感は大きかった。ファゼンダに帰りついて飲んだカイピリーニャ（ピンガとレモンと砂糖をまぜたカクテル）が腹にしみた。

＊＊＊

念で第一土・日の頃、知床の羅臼岳の計画があると耳にしたので、詳細は支部長・大塚武氏へ照会下さい。

⑨　一月十三日、出席十氏より新年度会費千円宛計壱万円入金。一月三十日新年会剰余金二千円繰入。

二木会通信を長らく御愛読下さいまして有難うございました！

（久保・記）

山岳保険加入のおすすめ

針葉樹会

保険担当幹事　宮下克彦

拝啓　陽春の候　皆様方にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

遭難対策態勢をより充実させるという趣旨に基づき、昨年度に引続いて、会員に山岳保険の任意加入の紹介を行います。

つきましては、ここに山岳保険加入募集について左記の通りご案内申し上げます。

記

1　加入する保険は「日山協山岳遭難共済」となります。

保険内容は、次の通りです。

(1)　死亡保険金額・一五〇万円

(2)　後遺傷害保険金・程度により四、五万～一五〇万円

(3)　捜索救助費用保険金・最高一〇〇万円

(4)　対象となる山行。(1)、(2)、(3)とも国内山行に限ります。

(5)　保険金受取人については、特に指定のない限り(1)、(2)については、針葉樹会(3)については、法定相続人。を指定。

(6)　保険証書は針葉樹会として一通受領することになりますので、会として保管（保険担当幹事）し、写しを各加入者にお送りします。

(7)　保険引受会社は、大正海上火災保険㈱となります。

(8)　本保険は他社の同種保険と比較し、負担金が最も有利であり、適用規則も最も簡便（例えば、事故発生後、直ちに仮払金支払を受けることができる）なことを考え、選択しました。

2　加入は任意で、加入の単位は会員個人ですが、事務都合上、会として加入のとりまとめを行ない、希望者の一括加入申請（五月二十日〆切）を行ないます。

3　保険料は、年額七、三二〇円（月額六一〇円、毎年四月加入、掛捨）ですが、本年度は中途加入（適用期間・五八年六月一日～五九年四月一日）となりますので、年額六、一〇〇円となります。

4　加入を希望される方は、五月十日迄に、担当幹事までご連絡下さい。

5　同時に、保険料支払については、左記銀行口座へお振込願います。もしくは、学生による集金。

口座番号・三井銀行・三井物産ビル出張所　五〇五〇七六五

名儀・針葉樹会・宮下克彦

尚、詳しい内容をお知りになりたい方は、左記担当者までご連絡下さい。

以　上

〒273 船橋市前貝塚町二六六ー三　三井物産㈱船橋寮B－四〇三　宮下克彦
Tel　〇四七四ー三八ー五六九一（寮）
〇三ー二八五ー五六四八（勤務先）

（参考）

八二年度山岳保険加入実績

八二年度「日山協山岳保遭難共済」への針葉樹会員の加入者は、望月会長以下二七名でありました。

年層別加入比率は、

五〇才以上	一〇名	三七%
四〇才～四九才	七名	二六%
三〇才～三九才	三名	一一%
二二才～二九才	七名	二六%
総数	二七名	一〇〇%

現在、針葉樹会員総数を二〇〇名とすれば、加入率は一三・五%となります。

会員諸兄のより一層の加入をお願い致します。（小林）

会務報告

1. ホワイト・セール隊遭難にかかる金子・小林OB訪印についての御家族への説明会

〔日〕昭和五七年八月二三日

〔所〕於　養和クラブ（千代田ビル）

〔出席者〕（御家族）、中村宜興、土方晋、萬濃誠士、（OB・学生）、望月達夫、南　亮進、西牟田伸一、金子晴彦、倉知　敬、加藤博行、前神直樹、米田篤裕、小林　修、安島孝知　以上十三名

2. 昭和五七年度忘年会

〔日〕昭和五七年十二月七日

〔所〕於　如水会館　武蔵野の間

2　昭和五七年度総会

〔出席者〕吉沢一郎、近藤恒雄、増山清太郎、中島　孚、柿原謙一、望月達夫、佐々木誠、日江井正己、宮城恭一、根本　大、久保孝一郎、山田亮三、鈴木　筆、高野秀男、小林茂雄、樋口　洪、石井左右平、田中一雄、山崎　拡、笠原広信、望月敏治、中村正司、佐薙　恭、上原利夫、倉知　敬、名和泰三、竹中　彰、佐藤久尚、金子晴彦、前神直樹、藤本敏行、佐藤活郎、中西　茂、米田篤裕、小林　修、宮下克彦

3. 懇親山行（スキー）の八ミリの上映他、歓談にて盛会であった。

会員異動

山本健一郎（昭和三二年卒）
シンガポールより帰国
三井信託銀行㈱国際部
TEL　二七〇ー九五一一

石原　脩（昭和三〇年卒）
富士電機製造㈱
生産管理本部　管理部長
TEL　二一一一　七一一一

4. 会員逝去

城戸　剛（昭和三四年卒）
脳内出血のため昭和五八年三月二三日死亡

5. その他、異動等がありましたら、米田篤裕（昭和五六年卒）、日本輸出入銀行、TEL二八七一一二二一まで御連絡下さい。

尚、新会員名簿は五八年総会までに作成し、会員各位にお渡し致します。

編集後記

第62号より開始した連載「山岳部年代記」は、今号はお休みです。息長く続けることを一番に、不定期連載ともなりましょうが、御容赦下さい。

×　×　×

海外より二通便りが届きました。

若手、引地氏は、三月末には内蒙古へ旅し、大陸での山想いをそれなりに昇華した様子です。

中島氏は、地球の裏側で、又々、スーパーマンぶりを発揮されています。ケービングにはあまり興味を覚えられなかった様ですが、それも良かったかも知れません。例の調子で突き進めば、「深い深い洞穴の終点は秋芳洞の入口だった」なんてことにもなりかねませんから。

×　×　×

五月連休は、六年ぶりの完全飛石となりますが、思い切れば十連休、皆様、色々とプランを練られたことでしょう。

お便りお待ちしております。

（小林　修）